

キネマ通信(#22)

映愛会（DF映画同好会）会報 （2025年8月1日）

今号の主な記事：

Member's Report：日本と中国を映画で繋いだ人々（菅原信夫）

劇場映画ひとくち感想：松山信洋/北田敬子/喜藤憲一/本田安弘/平尾光司/菅原信夫

「映画あれこれ」：本田安弘/鈴木謙一

映愛会お知らせ（2025年行事予定）

編集後記：教頭先生って何？



去る6月25日、映愛会有志による散策会を蒲田で開催しました。6月とは言え、すでに気温は30℃を越え朝方まで続いた豪雨のため高湿度という嫌な条件の下、歩行距離を縮め室内での活動を中心とした会となりました。それでも2時過ぎには夏の太陽が照りつける天気で、とても散策を続ける気もせず、蒲田駅を背景に記念写真撮影後、解散しました。映愛会の散策会はこのように天候に大いに影響される緩い活動ですので、身体能力が心配で参加を躊躇される方、そんな心配は全く無用です。これは胃袋以外は身体弱者の事務局（菅原）がリーダーをする限り保証します。

Member's Report

日本と中国を映画で繋いだ人々 — 中国映画事情 2 — 菅原信夫

本連載 1 では現代中国映画産業の一片をハルビンの映画館での鑑賞体験から考えてみました。
今回は中国映画と日本映画は産業として極めて深い関係を持つ点について、レポートしたいと思います。

(前号の記述：

満洲に詳しい方はよくご存知と思いますが、満映（満洲映画協会）は、満洲国と満鉄（南満洲鉄道株式会社）が折半出資した国策会社で、日本側理事長をあの甘粕正彦が勤めたことや、中国人スターとして売り出した李香蘭がいたことで未だに有名です。ただ、その政治面への注目が大きいため、映画制作についてはそれほど知られていません。今回の旅では映画制作に焦点を当て、1937年から1945年の会社解散まで、多い年で30本もの作品が日本人監督、中国人監督のもと制作された事実注目しました。現在、中国映画産業は制作本数、興行収益共に世界2位という位置にありますが、その基盤は満映時代から続く中国人材だったと言われています。（菅原）

1) 松竹蒲田撮影所

6月25日、映愛会有志による蒲田散策会が行われました。（表紙写真参照）
なぜ蒲田を選んだのか、それは松竹蒲田撮影所跡にその理由があります。

「中国では清朝末期に上海で映画会社が興り、上海で作られた映画が満洲地方を含めて中国全土に配信されていた。満洲事変以降、その上海映画界では抗日、反日を訴える映画が数多く作られるようになり、これに対抗するためにも満映（満洲映画協会）を設立する必要があると日本軍部は考えた。」※

「満映設立から二年後の昭和十四（一九三九）年、南京に中華電影、北京に華北電影が日本軍部の主導で相次いで設立された。設立の趣旨は満映に準じており、基本的には親日を推し進めるといふ国策に基づいた映画製作がなされた。」※

「そういえば、日本の松竹下加茂撮影所が閉鎖され、その現像所にいた人たちが大量に満映へ入社してきたことがあった。やはり牧野派（日活多摩撮影所から満映に転職した牧野満男氏）の穴を埋めるための措置であったのだろうか。」※

— 『満映秘史 栄華、崩壊、中国映画草創（角川新書）』石井 妙子，岸 富美子著 —



左は1935年ごろの松竹蒲田撮影所のモックアップです。 今回の散策会では、区民ホール清掃のためアプリコ地階にあるこのモックアップを見ることが出来ませんでした。我々はまさにここにある松竹橋を越えて敷地に入り、撮影所があった場所の環境を感じることができました。

「1923年（大正12年）9月1日、関東大震災によって撮影所は壊滅。蒲田での製作が困難になったため、同年9月10日、京都府京都市下加茂への移転を決定。松竹下加茂撮影所を新たに建設し、同地に拠点を移した。その為、野村芳亭をはじめ多数の専属スタッフ・俳優は同地へ異動したが、島津保次郎ら少数のスタッフは蒲田に残留した。」（Wiki）

「1935年（昭和10年）のサイレント映画・サウンド版からトーキーへの完全移行に伴い、古くから町工場の騒音が多かった蒲田では、次第に映画の撮影・製作に支障をきたすようになり、1936年（昭和11年）1月15日、神奈川県鎌倉郡大船町（現在の鎌倉市大船）に新たに開業した松竹大船撮影所（現存せず）に全機能を移転する。これにより、松竹蒲田撮影所は閉鎖となり、高砂香料工業に売却され、約16年の歴史に幕を閉じた。同地で製作した映画は1200本を超える。」（Wiki）

年代の流れ

1. 1936年
 - 松竹蒲田閉鎖。
2. 1937年～1938年
 - 満映設立期。技術系人材のリクルートで、蒲田経験者が複数参加。
3. 1940年以降
 - 満映は中国人俳優育成に重点を移し、日本人映画人は指導・裏方中心に。

2) 中国で活躍した日本の映画人

◎甘粕正彦 ー 満映理事長

◎坂根田鶴子 — 京都第一映画社から満映に迎えられた女性監督

◎李香蘭 — 満州で生まれ育った中国語のできる日本人女優

全体的な流れを感じるためには二つの前提があると思います。一つ目は日本で映画人としてキャリアをスタートとした人は、潰しが効かないというのか映画産業以外で生きてゆくのが難しいという現実。そのため、蒲田撮影所が閉鎖されると、満州に渡り新設された満映に入社し、とにかく映画の世界で生きてゆくという流れ。二つ目はそれを可能とした軍隊と広報という観点。特に民衆への文字でのアプローチが難しかった満州では、中国人向けの日本文化と日本軍をPRする映画を大量に作りました。そのため、映画制作に長けた日本人技術者が大量に必要なになったのです。その満映の経営を取り仕切るのが甘粕正彦。甘粕事件と称されるアナキスト大杉栄らを殺害した事件の首謀者として服役後日本を離れ、フランスを経て満州に移動します。満鉄が生み出す潤沢な広報予算を背景に、満映の経営を取り仕切ったようです。そんな満映が生み出したスターが李香蘭（のちの山口淑子参議院議員）で、満映関係者として甘粕と彼女の二人だけが撮影所外にある新京のヤマトホテルの個室を認められたそうです。それほど特例の許された存在だったのです。

3) 中国映画人のバランス感覚

前号で触れたように、今回訪問したハルビンの大手シネコンでの映画興行に供される作品は中国、米国、日本の作品がそれぞれ三分の一ずつとなっていました。政治的に中国とは対立する米国、日本が社会主義国やインドなど第3軸国家の作品を抑えているという事実には私個人は中国映画人のバランス感覚を感じます。

「『中華人民共和国の誕生を記念して国家が製作する第一回作品は、『橋』注1に決まりました。その編集を岸さんをお願いしたいのです」

— 『満映秘史 栄華、崩壊、中国映画草創 (角川新書)』石井 妙子, 岸 富美子著

この文章は、終戦後も日本への帰還ではなく中国にとどまり中国映画の制作指導に努力を傾けた映画編集者岸富美子さんが中国人上司から言われたものです。多くの満映関係者とともに中国での仕事を選んだ岸さんもすごいけど、敵性国だった日本人に映画制作の要である編集作業をやらせるという中国映画人のバランス感覚に驚きます。

そして、彼女はこうも書いています。

「映画が完成した時、王監督は私に「安芙梅」という中国名をつけてくれた。だから『橋』の編集者名は「安芙梅」となっている。中華人民共和国の誕生を記念する映画にスタッフとして日本人が関わっていることを公にするわけにはいかないという事情は、私たちにも理解できた。だから、私だけでなく、日本人技術者には、それぞれ中国名をつけ、それを画面上に表示してくれたのだ。私たちに不満はなかった。」

ここに映画を通した日中映画人のお互いへの信頼を見るようです。しかし、その後日本映画の上映は中国共産党の方針で禁止され、解禁は1972年の国交正常化まで待つことになります。最初に取り上げられた作品は、映愛会でも上映した「24の瞳」（木下恵介監督）で、好評を博します。映画歴史の本にはこんな記載があります。

「1972年の『二十四の瞳』の上映は、中国の一般観客に強い感動を与え、「日本映画は侵略の宣伝ではなく、人道と平和を描くことができる」という認識を広めた最初の大きなきっかけでした。

以来、日本映画は中国の映画興行になくはならないものとなりましたが、そこには戦中戦後を通して中国で活動した日本の映画人たちの努力と忍耐があったのです。その舞台の一つとなった長春の満映本社と撮影所遺跡。今も中国政府の指定する歴史建造物、映画博物館として保存、活用されていましたが、その源流である松竹蒲田撮影所跡の消滅度と比較すると日中の映画に対する重要性の認識に差があることを認めざるを得ません。

菅原信夫



満映時代の満映本社と撮影所（新京）



今回訪問時（2025年5月）訪問時に撮影した長影旧址博物館（長春）



（中国東北地方地図：ハルビン、大連には成田から直行便が出ていて、3時間ほどで訪問できます。また、ハルビンー大連間は高速鉄道が走っていて、途中にある瀋陽、長春に停車しても4時間程度で移動できます。来年夏もこのコースで訪中したいと思います。同行を希望される方はお声かけください。）（菅原）

劇場映画ひとこと感想

前号より多くの感想文を収録するために、いただいた投稿文は一旦クラウドに収納の上、そのクラウドへのURLを貼り付けることとします。 読みたい感想文のURLをご自身でクリックすることでお読みいただけます。

- 1) [「国宝」](#) 松山信洋 (4.5)
- 2) [「国宝」](#) 北田敬子 (5)
- 2) [「フロント・ライン」](#) 喜藤憲一 (4)
- 3) [「ドマーニ！ 愛のことづて」](#) 本田安弘 (4)
[「ミッション・インポッシブル/ ファイナル・レコニング」](#) (3)
[「太陽\(ティダ\)の運命」](#) (4)
- 4) [「The Spirit of Yokohama」](#) 平尾光司
- 5) [「はなちゃんの味噌汁」](#) 松山信洋 (4)
- 6) [「恍惚の人」\(1973年\)と「父と僕の終わらない歌」\(2025年\)を観比べる](#) 菅原信夫
- 7) [「ハルビン」](#) 菅原信夫 (4)

映画あれこれ

*前号より映画を主題とした短文を「映画あれこれ」として掲載を始めました。
複数映画にわたる主題を追ったり、一人の監督を年代、作品で追いかけてきたエッセイは当欄に当てはまりません。
内容により、映画感想文よりも長文になるかと思いますが、本欄では長さ制限をかけないことといたします。
また、プロ評論家の評論でも良く書けているものは※をつけて掲載したいと思っておりますので、会員の皆さんからの推薦もお待ちします。(編集部)

- 1) [8月は「戦争映画」](#) 本田安弘
- 2) [将棋とAI](#) 鈴木謙一
- 3) [ドレフィス事件とイスラエル建国秘話](#) 鈴木健一
- 4) [「国宝一伝統に生きる者たちの栄光と挫折、そして再生」](#) 尾崎一男※

映愛会お知らせ

* 8月8日 名作映画鑑賞会

上映作品 「Ready Player One」 (2018年アメリカ、スピルバーグ監督)

場所・時間 : 13時半より 日比谷図書館 17時より 懇親会 (有楽町ワイン倶楽部)

* 10月7日 劇場映画鑑賞会+講演会

課題作品 「美しい夏」 (2023年イタリア、ラウラ・ルケッティ監督、ミモザフィルム配給)

公開劇場、公開日 8月1日よりエビスガーデンシネマ等で公開

鑑賞会参加を予定される方は、課題作品を必ず事前に劇場にて鑑賞ください。

講演者 村田敦子ミモザフィルム代表

場所・時間 : 15時-17時 日比谷図書館

* 11月 散策会 「青梅市周辺を歩く」 (予定)

以上が予定されています。 詳細はそれぞれ単独情報として一斉同報メールで御案内します。

編集後記 一 教頭先生って何？

昨年半年をかけて日本語教師養成講座に通い、その修了証を持って鎌倉市教育委員会に駆け込んだところ、時期が良かったのかボランティアならすぐ学校を紹介できると言われました。2、3日してまず1校目が、その後バラバラと2校追加となり1学期は3校で教えました。私のような素人教師が採用されるのですから日本語教師が不足していることを実感しました。さて、小学校1校と中学校2校に通い出して知ったのが教頭先生の忙しさ。ボランティア日本語講師と学校を繋ぐ窓口は教頭先生ですが、とにかく校内におられても行方不明で捕まえるのに一苦労。我々みたいな外部の人間が児童と接する際の安全確保から、トイレ修理の業者対応、他校との教頭会議をする際の机の配置換えから飲み物手配まで、ぜんぶ教頭先生の仕事です。3つの学校で程度の差こそあれ、教頭先生が我々の子供時代必ず存在した小使いさんの役割も兼任されているのは明らか。そんなことを思いながら本田さんから教えていただいた「中山教頭の人生テスト」を観たら、まさに映画の中の中山教頭は学校だけではない、家庭も含め人生全部で小使いさんをされているようでした。そして思い出したのがボストンで数学教師をしている米国人旧友の仕事ぶり。「教えることって結局は無償の行為だ」と不登校児の家に私費で買ったお菓子を持って訪問している姿が印象的でした。教育者とか先生とかいうと、偉そうに聞こえますけど、世界どこでも自分は小使いさんなのだ、と言い切れるくらいにならないと本当の先生にはなれないし、それを「中山教頭の人生テスト」はよく教えてくれていました。(菅原)

キネマ通信第22号 (2025.8.1)

発行者：©映愛会 「キネマ通信編集部」

発行人：鈴木謙一

編集部：菅原信夫

sugahara@directforce.org